

韓国人日本語学習者の類義語動詞の習得状況に関する一考察

金 世 恩

要 約

本稿は去る2007年10月23日に中国北京にある北京外国語大学日本語研究センターにおいて開かれた韓中日合同セミナーで発表した内容の要約に、発表した後頂戴したコメントと反省、そして今後の方向を付け加えて述べる。類義語動詞の習得へ向けての予備調査として11の動詞を選別して受容度テストを行ったので、その内容を中心に発表内容を要約する。

【キーワード】

類義語動詞、韓国人日本語学習者、受容度、韓日比較

1. 発表内容の要約

1.1. 問題提起

韓国人日本語学習者（以下、学習者）にとって日本語の語彙習得はそれほど容易なものではない。学習者にはかなりの負担となる語彙習得だが、その中でも特に困難だと思われるものは何か。これには様々な意見があると思われるが、本稿では類義関係にある動詞、特に同じ漢字を使う類義語動詞の習得に着目した。その理由は、まず一般の国語辞典や類語辞典などに書かれている曖昧な説明と韓国語訳もほぼ同じで、堂々巡りのような感じを受ける。また、同じ漢字を使用して、それ自身が多義語であるところが習得を妨げているのではないだろうか。そこで、同じ漢字を使う類義語動詞の習得のために新しい提案が必要だと思われる。認知言語学的な観点から分析し、学習者に提供することで、認知言語学的なアプローチが習得に有効なのかどうか、また、有効ならどのような効果があるのかを調べてみたい。また、韓国語と日本語を比較することでさらに習得に役立てることはできないだろうか。

1.2. 研究課題

上述したような問題を解決するための研究課題をいくつか挙げてみた。一つ目に研究の対象となる同じ漢字を使う類義語動詞を選定する。二つ目に選定された動詞を認知言語学的な観点から分析し、学習者の類義語習得にどのような効果があるのか、つまり有効なのかどうかをみる。三つ目に認知言語学的な分析をもとに類義語の提示や教授法などについて考察する。四つ目に韓日の認知領域の共通点と相違点を考える。共通点は習得しやすく、相違点は習得困難だと予想されるが、その反対の結果にも注目してみる。

1.3. 予備調査

1.3.1. 調査の目的

本研究は同じ漢字を使う類義関係にある動詞（以下、類義語動詞）の習得に認知言語学的なアプローチが有効かどうか、有効ならどのような方法が最も有効で、それはどんな効果なのかを調べることを目的としている。そのために、まず認知言語学的なアプローチを行う前の学習者の類義語動詞の習得状況を調べ、考察し、本調査へ向けての準備が今回の予備調査の目的である。

1.3.2. 調査対象者

学習者は日本語専攻の大学生が38名で、日本語母語話者が5名であった。

1.3.3. 調査項目の作成

まず学習者の予備調査のために日本語能力試験の語彙レベルを参考にして、動詞を4組選定した。

- ・③上(あ)がる・④上(のぼ)る
- ・③下(お)りる・③下(さ)がる・②下(くだ)る
- ・④開(あ)く・④開(あ)ける・③開(ひら)く
- ・④閉(し)まる・④閉(し)める・②閉(と)じる

(○の中の数字は日本語能力試験のレベル)

本研究でこのような動詞を選定したのは、調査対象者のほとんどが初級が終わったばかりだと推定されたので、できるだけ3級以下にあたる動詞を選んだ。受け持ちの学生を対象にした調査だったが、初級にあたる授業を既に取っている学生たちであったからである。また、実施した時期というのが学期末で、2級レベルにあたる「閉じる」と「下る」でもテキストでは扱われていたので、含むことにした。

文作成に当たって、参考にしたものは、『完成大学日本語』と『外国人のための基本語用例辞典』だが、

まず、テキストである『完成大学日本語』から例文を抽出し、例文がなかったり、適当な例文がない場合は『基本語用例辞典』から抽出した。

1.3.4. 調査方法

松田（2004）では、文の受容面で「語の意味を知っていること」を「母語話者と同じように適切文を適切だと判断し、非適切文を非適切だと判断できること」であると述べている。習得を考える際に受容と表出（算出とも言いますが）を考慮しなければならない。Nation（2001）でも、語彙知識を受容と表出に分けて考えている。従って、本研究でも語彙習得を「受容」と「表出」の面に分けて考察していきたいと思う。

調査方法としては「文の受容判断テスト」を学習者と母語話者に対して行い、刺激文は20文である。

1.3.5. 調査結果と考察

特に受容度の差があった「あがる・のぼる・おりる・さがる・くだる」と「あく・あける・ひらく・しめる・とじる」を図1と図2にまとめてみた。

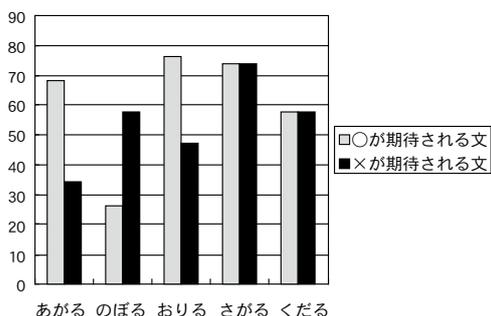


図1 学習者の受容度 1

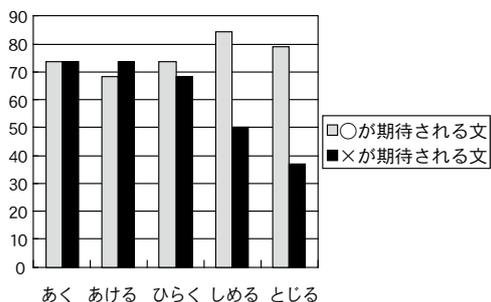


図2 学習者の受容度 2

- 1) 「(×) あがる」の誤答率が高いのは、韓国語の影響もあると思われる。→ 意味の拡大使用
- 2) 「のぼる」は4級の単語だが、「(○) のぼる」は韓国語で「さかのぼる」の意が入るので、初級終了の

学習者には難しいのではないか。

- 3) 「(×) のぼる」の受容度が高いのは今後さらに詳しい調査が必要だろう。
- 4) 刺激文を20文にしたため、正確な分析が無理だった。2倍以上増やす必要があると思われる。
- 5) 受容度をどの線から「高い」、あるいは「低い」と解釈できるのか基準が求められる。

2. 研究動機

「韓国人日本語学習者を対象にした語彙習得の研究」をテーマの大きな枠組みとして考えていた。博士課程に入ってから「習得に関わる要素とは何か」ということに興味を持ちはじめた。そのうち類義語の習得が自分の経験（学習者、教師としての）に基づいて困難であったことに気づき、類義語習得に目を向けることになった。が、類義語と言っても非常に範囲が広く、研究を始める身としてはなるべく範囲を狭く絞る必要があると考えた。そこで、韓国人としては同じ漢字を使用しながら類義関係にある動詞（例えば、下がる・下るなど）が習得しにくいのではないかと想定して発表題目を決めた。

3. 発表後のコメントと反省

まず博士論文のテーマと今回の発表がかみ合っていない。そして、「習得要因」という言葉がよく理解できない。というコメントをいただいた。発表の内容があまりまとまっておらず、考えていることが上手く書き表せなかったこと、先行研究の調査が全然行われなかったことなども原因の一つであると思われる。もちろん方向修正は必要である。「習得要因」という言葉については以前にも指摘をいただいたことがあり、他の用語に変える必要があると思われる。

発表内容についての具体的な指摘としては、グラフに関するものがあつた。グラフが読み取りにくいので、書き方に工夫する必要があるということだった。自動詞と他動詞の区別が綿密になされていないことについてもコメントをいただいた。

韓国語（母語）の影響で習得が困難であるかどうかは断言できない部分がある。対象語がほとんど多義語なのでそれぞれ分析しなければならないことや形の類似などが影響しているかもしれない。なので、母語の影響ということ自体は簡単だが、非常に危険である。これは最後の最後まで残すべきである。というコメントもいただいた。

そして、受容についての調査だけで、算出についてのものがなかったというご指摘もあつた。

このような指摘はご最もで、今回の発表のテーマは自分の経験に基づいて単純に決めたところもある。2007年11月10日に韓国建国大学で行われた建国日本文化言語学会第4回国際学術シンポジウムでお茶の水女子大学の佐々木嘉則先生のご講演を拝聴して、理論もなく自分の経験で研究を始めることがどのようなことを勉強させていただいた。早く書かなければならないという思いで、研究テーマを性急に決めてしまったので、先行研究を調べ、これからもう一度自分のやりたいことを見つめ直すことが望まれると思う。

4. 今後の方向

今回の発表で自分のいるところが薄らながら認識できた。共に前述した佐々木先生のご講演を拝聴し、今後の課題を次のように考えた。まず先行研究の整理からしなければならない。類義語や類義語習得に関する先行研究はもちろん、韓国語との比較対照研究も考慮しているので韓国語における類義語や類義語習得に関する先行研究も調べる必要があると思う。日本語と韓

国語の比較対照をどのように進めて行くかはまだ見当がつかない。ただ、韓国人日本語学習者を対象にした研究をしたいので、日本語と韓国語の比較は範囲に入れるべきであると思う。

先行研究を整理し、対象を絞り、論文の基調となる理論を見出すことで、博士論文を書くための基盤を整えることが大事であろう。

参考文献

- 小島義郎 (1988) 『日本語の意味英語の意味』 南雲堂
投野由紀夫 (1987) 『英語教育研究リサーチ・デザイン・シリーズ⑦英語語彙習得論—ポキャブラリー学習を科学する』、河源社
松本曜 (2003) 『シリーズ認知言語学入門第3巻認知意味論』 大修館書店
糸山洋介 (2002) 『シリーズ日本語のしくみを探る5 認知意味論のしくみ』 研究社
森山新 (2002) 「言語習得研究と認知言語学」、『言語文化と日本語教育』

きむ せおん／同徳女子大学大学院 日語日文学科
seondesu@hanmail.net